

1. 実況上の着目点

- ① 前線が華中から南西諸島付近へのびており、500hPa 5640m付近のトラフに対応した低気圧が前線上の華中を東北東進。前線付近の東シナ海では強い雨や激しい雨を解析。雷を検知。
- ② 三陸沖と日本の東の高気圧の間で東日本太平洋側は気圧の谷となっており、太平洋側で雷を検知し、激しい雨を解析。
- ③ 500hPa 5340m付近の寒冷渦に対応する低気圧がアムール川下流付近を東北東進。地上シアアラインが沿海州を東進。



主要じょう乱解説図

2. 主要じょう乱の予想根拠と防災事項を含む解説上の留意点

- ① 1項①の低気圧は、31日にかけて発達しながら対馬海峡から日本海を通過して三陸沖へ進み、4月1日は千島の東へ進む。また、1日朝までには、低気圧からのびる前線上の東シナ海に、500hPa 5700m付近のトラフに対応する別の低気圧が発生し、種子島・屋久島付近を通過して本州南岸の海上を東北東へ進む。前線や低気圧に向かう下層暖湿気(850hPaの θ_e 330K以上)の影響で、大気の状態が非常に不安定となり、雷を伴った激しい雨や非常に激しい雨が降り大雨となる所がある。また、前線や低気圧の影響で、強い風や非常に強い風が吹き、波が高くなりしける所がある。南西諸島と西日本では1日にかけて、東日本では31日～1日は、土砂災害、低い土地の浸水、河川の増水に注意・警戒し、落雷や突風、降ひょう、局地的には竜巻などの激しい突風に注意。西日本では31日にかけて、北～東日本では31日～1日は、強風や高波に注意・警戒。31日にかけては、低気圧に向かって強い風で多量の水蒸気が流れ込むため、降水量が多くなるおそれがあることに留意。31日にかけての大雨で土壌雨量指数が高くなり、1日に別の低気圧による大雨となった場合は、土砂災害の危険度が高まりやすいことに留意。
- ② 1項②の気圧の谷は、30日夜にかけて上層リッジが接近するため次第に不明瞭となるが、気圧の谷は太平洋側沿岸を北上する。また、東北地方には1項②の高気圧縁辺の下層暖湿気が入る。気圧の谷や下層暖湿気の影響で大気の状態が不安定となる所がある。北～東日本では30日は、落雷、突風、降ひょうに注意。
- ③ 南よりの風の影響で、全国的に850hPaの気温は平年より5～10℃以上高くなる。気温の上昇や2項①の降水の影響で雪解けが進む所がある。北～東日本の多雪地では1日にかけて、なだれや融雪に注意。

3. 数値予報資料解釈上の留意点

総観場はGSMを基本、量予想や降水分布はMSMやLFMも参考。

4. 防災関連事項 [量的予報等]

- ① 雨量(18時からの24時間)：四国200、東海・近畿・九州南部150、九州北部120、関東甲信100mm。
- ② 波浪(明日まで)：関東・伊豆諸島・東海・近畿・四国5、東北4、その他広い範囲で3m。
- ③ 高潮(明日まで)：大潮の時期。西日本では、注意報基準を超過する所がある。

5. 全般気象情報発表の有無

「雷と突風及び降ひょうに関する全般気象情報」を17時頃発表予定。